

外界から隔離された館で、予告された殺人が起こる事件を扱った推理小説なのだが、作者はこの幻想郷にはいない。由来も外の世界の物らしいその本を何度も読み直したものだ、と彼は回想する。

最も彼は、犯行予告通りに、監視の目を潜り抜け大胆不敵に残酷な殺人を起こす事件の内容そのものよりも、探偵たちが犯人の思考を追おうとする試みの中に表出する外の世界の様々な情報こそ、その小説を楽しむ要素として読みこんでいた。

「——ねえ、この本幾らするの？」

しばらく読書に耽っていた輝夜は、おもむろに顔を上げて質問する。どうやら彼女はこの本が欲しくなつたようである。前述の彼のその本の楽しみ方はどちらかと言うと学術書の類の読み方である為、彼女が本を

所望する程興味を持った事に霖之助は多少驚く。

本来なら『非売品だ』と答えれば済むが、彼女が相手だとそれは通用しない事を彼は知っていた。

「それは香霖堂の中でも高価な部類に入る物だね。外世界の貴重な資料であり、保存状態も良い」

「あらそう。なら別にいい」

用意した交渉のテーブルに着く気などさらさら無い反応に、霖之助は思わず眉をひそめた。

「それよりも、何か面白い話でも聞きたいわ。読書は一人でも出来るから」

それなりにぞんざいな扱いで本を置いて、輝夜の視線は向かいの彼に注がれる。

「生憎そこまで暇じゃあないんだけどね」

「それは無いでしょう。お店に入った時に見えた貴方